氏　　名　中村博武（なかむら ひろむ）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第49号
学位授与の日付　平成10年11月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科 文化・地域環境学専攻
学位論文題目　宣教と受容
——明治期キリスト教の基礎的研究——

論文調査委員　(主査)教授松田 清　教授ヨリッセン F・エンゲルベルト　教授薗田 稔

論文内容の要旨

本論文は明治初期キリスト教教典の成立史（第1篇全4章），慶応3（1867）年6月浦上の復活信徒による寺請制度拒否に端を発した流罪事件，いわゆる浦上四番崩れにおける宣教師の論理と信徒の信仰構造（第2篇1章），浦上四番崩れに対する外国人居留地の反応（第2篇2章），1870年に天津で起きた中国民衆による外国人虐殺事件，いわゆる天津教案に対する外国人居留地の反応（第2篇3章），および内村鑑三の「万朝報英文欄」と英字新聞とのキリスト教論争（第2篇4章）を分析と考察の対象として，明治期キリスト教の根本問題を宣教と受容の両側面から実証的に解明し，資料篇に関連する新資料3種の翻刻および解説を収録している。

パリ外国宣教会の宣教師プティジャンが復活信徒のために明治初年に出版した一連の教義書，いわゆるプティジャン版は慶長年間の古キリシタン版あるいは潜伏キリシタン伝来の祈祷書を底本としていることが従来の研究により判明している。すなわち，『科除規則』（明治2年）は『サルバトル・ムンジ』（1598年，国字本）を，『玖瑰花冠記録』（明治2年）は『ロザリオの経』（1622－1623年）を，また『胡無知理佐无之略』（明治2年）は『こんちりさんのりやく』（1603年）の伝写本を底本にしている。論者はプティジャン版と漢籍祈祷書および教義書との関連を初めて追及し，プティジャン版『聖教日課』（明治元年，明治4年）所載「さんたまりやほまれのおらすしよ」（略称「マリヤの連祷」）が北京版祈祷書『聖教日課』（1854年重刊本）所収のロンゴバルディ作「聖母徳叙祷文」を，また『彌撒拝禮式』（明治2年）がジウリオ・アレニの教義書『彌撒祭義』（1849年重刊本）をそれぞれ典拠としていることを解明した。同時に，いずれの場合も伝統的キリシタン用語で潤色を加えられており，これにはパジェス版『コリャード懺悔録』および『日仏辞書』の使用された可能性が高いこと，『聖教初学要理』（慶応4年）の頭注は漢籍教義書を典拠としていることを指摘した。さらに，プティジャン版の協力者阿部眞造が棄教後の明治5年に教部省へ提出した『告解式』にも漢籍教義書からの収載を発見し，その典拠本と収載の全貌を示し，京浜地域の知識層への布教目的で編集されたことを推論した。

一方，明治初期プロテスタントの新約聖書翻訳において，いわゆる横浜翻訳委員会訳『新約聖書』は先行のヘボン・ブラウン訳をもとに格調の高い漢文体訳に改訂したことで知られているが，論者はヘボン・ブラウン訳『馬太伝』への奥野昌綱の書き入れ草稿（新資料）の分析によって，委員会訳『新約聖書』の翻訳過程において，宣教師側の主張に応じて通俗的文体および語彙の採用も試行されたことを初めて指摘した。また，委員会訳の優れた特長とされる，漢語への独特な訓読，意読の振り仮名は日本人補佐の工夫によるのではなく，ヘボン『和英語林集成』を用いて欽定訳聖書を訳出し，その和語を漢訳聖書の漢語に強引に結合させたため生まれた，との仮説を提出した。

つぎに，論者は関連一次資料をもとに，浦上四番崩れの要因となった寺請制度拒否を宣教と受容の両側面から考察した。すなわち，拒否を信徒に勧めたプティジャンら宣教師が浦上の復活信徒に，迫害をも辞さない17世紀の殉教者像，信仰の勇者像を投影し，カトリック信仰の真正性の宣揚を目的としたのに対し，信徒らは，献身的な宣教師を祖先の信仰の師デウス

の名代ととらえて祖先と宣教師に対する忠孝倫理を全うしようとし，また人格神との個人的な関係から魂の救済を求めるのではなく，祖先・親子・親族・知己という人間的なつながりを絶対として天国での再会を求める，日本人の伝統的死生観に立っていたと推論した。

最後に，論者は長崎および横浜の外国人居留地で発行されていた英字新聞，および長崎在住の英国教会宣教協会（Church Missionary Society）宣教師の本部あて書簡（バーミンガム大学所蔵）にみられる浦上四番崩れ関連の論評，および天津教案に対する上海租界地の英字新聞の論評を綿密に検討し，これらの論評の共通点として，世界の文明化とキリスト教化との混同，東アジアの宗教への無理解，その背後にある異教徒への偏見を指摘した。明治30年２月から１年あまり「万朝報英文欄」主筆となった内村鑑三が居留民の不道徳を告発したことは知られているが，論者は内村鑑三と論争した長崎の英字新聞の論評を初めて総合的に分析し，日本の文化的伝統に立つキリスト者の立場から，欧米のキリスト教文明絶対優位の固定観念に反撃をくわえた，内村のキリスト教受容の独自性を明確化した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

Ａ４判414頁（本文298頁，資料篇100頁，参照文献表16頁，400字詰原稿用紙1366枚相当）からなる本論文の最大の長所は，資料的制約のため天津教案の記述については資料に裏付けられない民衆史観に立っている第２篇第３章（「天津教案に対する外国人居留地の反応」），新聞紙上の論争に特徴的な文体をめぐる応酬の分析が不十分である第２篇第４章（「内村鑑三『万朝報英文欄』と英字新聞とのキリスト教論争」）にやや難点を見いだすとはいえ，全篇を通して内外の研究史をふまえ，内外の関連一次資料を博捜し，英語，フランス語，中国語，ギリシャ語，ラテン語にわたる豊富な外国語知識にもとづく資料操作能力と精密な資料分析力をもって，実証作業をすすめている点にある。国内では長崎をはじめ国内諸機関所蔵の一次資料（漢籍教義書，舶載洋書，長崎奉行所文書，居留地発行の各種英字新聞，関連諸写本）を徹底的に調査し，海外ではバーミンガム大学付属図書館所蔵CMS資料，上海図書館所蔵関連資料を現地において精査している。これら一次資料の多くは論者自身が内外において発掘あるいは整理した新資料である。一例をあげれば，日本関係の上記CMS資料は最近（1997年）商業出版によるマイクロフィルムが利用可能になったが，論者の調査はこれに先駆けたもので，資料篇に飜刻された宣教師エンソーの書簡の分析をはじめ，本論文は当該分野で研究の最先端を切り拓いている。

第２の長所は第１篇「明治初期キリスト教経典の成立史」において，従来等閑視されてきた漢籍教義書との関連を，原テキストの厳密な比較分析によって初めて解明し，従来の多くの謬説を覆している点にある。特に，「マリアの連祷」の漢籍典拠本の解明は「キリシタン伝来書の底本」説（新村出），「ラテン原典の翻訳」説（海老沢有道）をいずれも完膚無きまでに打破するものであり，本論文の白眉である。また，横浜翻訳委員会訳をめぐる奥野昌綱の通俗訳草稿の飜刻と分析，委員会訳成立に関する上記の仮説は，明治期聖書翻訳史の研究における極めて重要な貢献であり，高く評価すべきである。

第３の長所は浦上四番崩れの研究において，宣教師による宣教の論理と復活信徒の信仰内容の分析という従来にない視点にたち，文献実証と並行しつつ十分説得的な論述をすすめている点にある。また，論者の分析は信徒資料，居留地の英字新聞，宣教師の著作，書簡類にみられる言説のみならず，西洋列強（仏英）政府の対応，宣教の論理に対抗する長崎奉行，明治政府，神道（大国派），仏教（真宗）側の反応にもおよび，従来の浦上四番崩れの研究にはみられない総合的なものである。

惜しむらくは，ロンゴバルディ，ジウリオ・アレニなど17世紀初頭の在華イエズス会士の手になる漢籍教義書が明治期キリスト教教義書の成立に深くかかわっていることをみごとに解明しながらも，その比較文化史的意味への考察に欠けている点である。また，本論文のテーマに対しては，ロゴス中心主義的なキリスト教の信仰構造を相対化する視点，文化変容の視点などを取り入れた複眼的な分析が試みられてもよい。しかしながら，本論文はすでに上記の長所を有し，明治期キリスト教をめぐる和漢洋の異文化接触をテーマとする，すぐれて文献実証的な研究となっている。しかも，博士後期課程３年間にまとめられたものとして質量ともに十分すぎる水準に達している。既成の学問領域を越える新しい日本文化研究をめざして創設された，本研究科文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい優秀な論文といいうる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成10年９月16日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。